

表している  
代表する俳  
句事だが、  
というバク  
ピアノ演奏

ために  
親

「は、中  
作家、余  
元る男」の  
朝鮮戦争の  
仕事に従事  
ブロン売  
ズして結  
幸せな家  
の時、11歳  
彼女の昔の  
たというう  
動に発展す  
族の絆の崩  
である。見  
恩子を救う  
父親の驚き  
は家族のヒ  
まらない、  
進む民衆の  
メッセージ

# 上を向け笑おう

太田Doko



▲作・演出＝坂手洋二。11月23日～12月2日、東京の座・高円寺1で上演された。左から渡辺美佐子、杉山英之。撮影＝姫田蘭

## 燐光群公演 『サイパンの約束』 戦争を追体験する人々

どの時代も、人々は良い暮らしを求めて、あるいは今の場所では生活できず、移住を選択する。かつて大日本帝国が植民地化した日本の「外地」には、「内地」では食べられない人、一旗揚げようという人が移り住んだ。南洋諸島のサイパン島、テニアン島にも戦前から日本人が移住し、8割が沖縄出身者だったという。

アジア諸国の「日本人街」では、異国情緒を吸収しながら、景気のいい暮らしを享受していた日本人たち。渡辺美佐子演じる晴恵が、サイパンでの思い出を語り、劇中の演劇ワークショップという設定によって、戦争を知らない世代が当時を追体験していく。

だが、日本軍の無謀な軍事拡張主義、そして米軍の攻撃により、「平和な暮らし」は壊される。守ってくれるはずの日本軍が、民間人の食糧や隠れ場所を奪い、「生きて虜囚の辱めを受けず」という軍の命令により人々を自決に追い込む姿は、沖縄戦の悲劇と重なる。

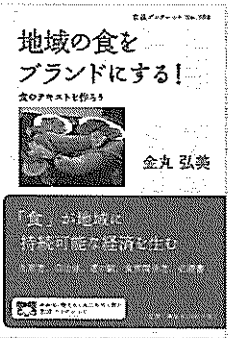
日本軍が苦勞して造った空港

を米国が占領し、本土空襲や原爆投下のために米軍機が飛び立っていき皮肉な事実。大きな渦に巻き込まれていく晴恵たち民間人は被害者なのか、加害者なのか。現地の人が使っている地名を「バンザイクリフ」にしたのは誰なのか。

過去を再現しながら、気がつけば現代と通底していることの多さに、身震いする。私が聞き書きしたフィリピンからの引き揚げ孤児の姿と、劇中の人物とが重なり、胸が熱くなった。「戦争は二度としてはいけない」という彼女たちの言葉を、今こそかみしめたい。(大橋由香子)

## ●「地域の食をブランドにする！食のテキストを作ろう」

## 人々の連携で魅力アップ



▽金丸弘美／著、岩波ブックス  
ット・本体620円十税

地元ならではの農水産物をもっと全国的に知ってもらい、地場産業を盛り上げたい。多くの自治体や生産者の思いは切実だ。それをどう行動に移し、思いを実現させていくか。ここが悩みどころである。現在もあちこちでこういった相談を受ける著者が勧めるのが食のテキスト化である。テキストとは、環境、歴史、文化、品種、栽培法、栽培の履歴、量、栄養価、出荷法、食べ方まで調べ、特徴を明確にするもの。そして、テキストを作成したら、参加型ワークショップまで行なってほしいと言う。

本書では、著者が経験を重ねる中で導き出したテキスト化の作成方法からワークショップ開催の仕方、さらには地域振興のためのプロモーションの仕組みまで具体的な事例をもって紹介する。大切なのは、地域の人々が主体となって連携して取り組むことだ。行政と生産者はもちろん、大学の専門家や料理研究家、商店街や直売所、道の駅などのノウハウを連携させることで、売り出すだけでなく、ブランド化、食育、観光にもつなげることができる。ぜひ実践して、地域の活性化に役立ててほしい。(則竹知子)